

専務のコラム



昔、親や学校の先生に「読書をしなさい」と言われた経験は誰しもあるだろう。

知識を深めるため、情報を集めるため、情緒を豊かにするため等、理由は様々だが、昔から落ち着きのなかつた私はじっと座って本を読む暇があったら友達と野山を駆け回る、というのが常だった。読むと言えば漫画本くらいで、夏休みの宿題の定番である「読書感想文」は苦痛以外の何物でもなかつた。なにせ私は文字しか書いていない本だと、ページを2枚程めくったところで瞼が重たくなってしまう体质なのだ。と思っていた。

ところが、大人になってふと手に取った本に没頭したことがきっかけで読書が大好きになった。何より、文字だけで読み手にその主人公のおかれられた状況や心の機微を見事に表現し物語に引き込ませる筆力に圧倒されてしまうのだ。やくざ映画を観た人が目つきも鋭く大股で映画館から出てくるように、長編小説を読み終えた後は本の世界から現実に戻るのがもったいなくて一時余韻に浸る時間も私は好きだ。



そこでふと思うのだが。

文字を書くことを生業とする作家の語彙力はもちろん、日本語の表現力の多さと面白さ（難しさともいう）に考えが至る。様子を表現するとき、ただ「歩く」の前に「てくてく」や「とぼと」付け加えるだけでその人の年齢や感情まで相手に伝えることが出来る。いわゆる「オノマトペ」というやつだ。「オノマトペ」とは擬音語や擬態語のこと、日本語は外国語に比べてこれがダントツに多いそうだ。

例えば「ギャーギャーわめく」と言っても絶対「ギャーギャー」とわめいてはいないはずだ。

「ブツブツ言う」も本当に「ブツブツ」と言っていたら病院に連れていかれるだう。

「すくと立った」と言っても「すく」という音を聞いた者はいないし、「あんぐり」と言いながら口を開ける人もいないのだ。

状態や感覚を表すのにこの「オノマトペ」は便利で使いやすいのだが、中には「ワーッとしたらバツとなってズコーってなった」と「オノマトペ」しか使わない人もいます。そう、そこのあなたです。注意しましょう。

親日で有名なパラオ共和国は、第一次世界大戦後30年間日本が統治していたが、水道や道路等のインフラ整備や子供たちに学校教育を進めた日本に感謝し、今でも当時子どもだった老人たちは日本語が通じるという。また、その名残でパラオ語になってしまった日本語も数多くある。電信柱を「デンキバシラ」、ハンガーを「エモンカケ」、そしてビールを飲むことを「ツレナオース」、美味しいことを「アジダイジョーブ」というらしい。パラオの人々に言葉を教えた日本人の人となりが見えてくるようですね。ただし、家庭で使う時はくれぐれも「アジダジョーブ?」と言わないよう用心して欲しい。更に名前だが、タロウやハナコはもちろん、イチロウやカトウサンが名字だったり、なぜか「まな板」くんまでいるらしい…。有難いことです。

「Thank you」とストレートに相手の行為に対して伝える英語と違い、「有る」ことが難しい」と書いて「有難う」という日本語は、相手よりも自身に向けた言葉が多い。「おはよう」も「おやすみ」も言わば「早い」、「休む」と言っているに過ぎない。英語は相手との関係性を重要視しているのに對し、日本語は共感を求める言語であり、そもそも言語の持つ役割が違うのだという。よく日本人は自己主張が下手であると言われるが、日本語にはお互い穏やかで平和な關係にする仕組みがあちらこちらに潜んでいるのだとしたら、その特徴を知っておくのも良いのかな、と思っている。

最近、1才になったばかりの姪の子どもが絶賛日本語習得中であり、私たち大人の話す言葉をじっと聞いている。実に不安である。

